

都倫研 第2回読書会  
課題図書 ルソー『人間不平等起原論』岩波文庫

都立荒川商業高等学校 伊藤昌彦

課題図書設定の理由

第一にどの倫理の教科書にも記載されている人物であり、第二に文庫のような読みやすい形で出版されていて、第三に以下の問題意識によるものである。

人間社会は、はたして進歩しているのだろうか。

さまざまな技術の発達、その光と影の両面を見せつけている。たとえば原子力技術は莫大なエネルギーを生み出してきたが、放射性廃棄物の問題を抱え、原子力発電所事故の災害を招いた。

仮に進歩し続けているとしても、この進歩の行く末はどうなるのであろうか。先進国のような大量のエネルギー消費をともなう生活を世界中の人たちがこれから同じように送ることは不可能であろう。現在のような私たちの暮らしは一地域の一時的なものではないだろうか。

それでは、私たちの社会は今後、どうあるべきか。

教科書にはルソーの標語として「自然に帰れ」という記述がある。文明社会を捨てて、自由で平等な自然に戻るべきだというふうにとらえてしまいそうであるが、そう単純ではあるまい。

このような問題意識を持ちながら、レヴィ＝ストロースが、『悲しき熱帯』の中で「私は、またしてもルソーのことばであるが「もう存在していず、たぶんまったく存在しなかったし、おそらくこれからもけって存在することがないであろうが、しかし、それについての正しい観念をもつことは、われわれの現在の状態をよく判断するために必要であるところの」一つの状態を、求め続けた。」と述べているように、現代の社会の状態を理解するために、ルソーの『人間不平等起原論』を参考にしていきたい。

『人間不平等起原論』の構成

本論は第一部と第二部から成っている。第一部は人間の特質である自由の意識と自己改善能力、言語の獲得、憐れみの情、自然状態における不平等の影響の少なさなどについて述べられている。第二部は、所有権の発生と法律の制定によって不平等が拡大していき、専制主義に行きつくことが述べられている。

いろいろなところで、まるで現代社会を批判しているように思えるところがあるので、われわれ自身の問題として論じてみたい。